

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ①人材養成目的に沿った科目構成の整理

##### ●神戸大学経営学研究科会計システム専攻

##### 「経営学研究者の先端的養成プログラム」の事例

###### (具体的に何を実施したのか)

コースワークを強化するために、開設科目の再編成を行った。改良の第1として、知識の段階的習得をさらにきめ細かくし、段階を3段階方式にしてシームレス化を図った。具体的には、第3群科目をさらに2段階に分割し、第1群科目の内容に直接接続し、その発展的内容を教える科目とその研究分野の真にフロンティアの研究について教える科目とに分けることにした。そして、第1群科目に接続する発展科目は、その分野を含め関連する分野で研究しようとする学生が、発展的な内容としてぜひ知っておくべき知識を教えることとした。

改良の第2として、方法論教育を強化した。まず、第2群科目である「定性的方法論研究」の内容を、経営学研究の方法論を学ぶ授業として再設計した。次に、統計的方法論を、より丁寧に教えるために第3群科目を設けた。それによって、第2群科目である「統計的方法論研究」の内容を統計学の基本事項に集約し、統計学を学ぶために必要な確率論の知識は「統計的方法論特殊研究(確率モデル)」で、統計学を応用してデータ分析を行う発展的な方法は「統計的方法論特殊研究(応用回帰分析)」、「統計的方法論特殊研究(同時方程式分析)」、「統計的方法論特殊研究(非集計データ分析)」等で、それぞれ段階的に学べるようにした。

###### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

科目の編成においては、経営・会計・商学各分野の専門科目の履修モデルを考慮し検討が行われた。特に「定性的方法論研究」のような方法論教育は、経営・会計・商学共通の履修科目となるため、どの分野の学生にも役立つものとなるよう、各分野の教員が意見を出し合い、関連教員が得意とする手法を分野横断的なオムニバス形式で提供するようにした。

###### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

第2群および3群科目を中心に体系的に再編成したことで、学生は、論文作成に向けて必要な専門領域科目と方法論科目を、体系的に履修、理解することができるようになった。このような取り組みに呼応するように、応用科目である「特殊研究」の科目数および履修者数の増加がみられた。2006年度の特特殊研究の開講数は29であったが、以降、31(2007年度)、33(2008年度)、32(2009年度)とやや増えた。他方、総履修者数は、在籍者数が100人前後と変わらない中で、116

(2006年度)、159 (2007年度)、218 (2008年度)、277 (2009年度) と増加した。特殊研究科目の履修者が顕著な伸びを見せたのは、講義科目のシームレス化の1つの成果であるとみられる。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### B. 円滑な学位授与の促進

#### ③論文作成支援の充実

##### ●神戸大学経営学研究科会計システム専攻

##### 「経営学研究者の先端的養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

論文の国際的な評価を組織的に高めていくために、ゼミにおける研究指導を補完するためのセミナーシリーズ（論文作成セミナー、投稿・発表セミナー、研究セミナー、博士論文発表会）を導入した。

論文作成セミナーは、講義によって行われるコースワークと、ゼミで行われる研究指導の中間的な仕組みであり、研究におけるデータ分析の指導をゼミの枠組みを超えたセミナー方式で行うものである。投稿・発表セミナーも中間的な仕組みであり、成果が出た研究をどのように世界に発信していくかをゼミの枠組みを超えたセミナー方式で行うものである。1つは、論文を国際的な査読付き学術雑誌に投稿していくトレーニングセミナーであり、もう1つは、国際学会発表のトレーニングセミナーである。

研究セミナーは、他の研究者が行った研究を本人から解説してもらう場であり、博士論文発表会は、博士論文提出予定者全員が、その博士論文仮審査の段階で、その博士論文の内容を1時間の公開セミナーで発表するものである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

論文作成セミナーでは、ゼミにおける研究指導との整合性、補完性を高めるため、手法の専門教員と論文に関連する領域で該当手法に関する分析知見のある教員がペアとなって指導に当たることができるようにした。例えば、マーケティング分野の統計的分析を扱う論文指導においては、統計的手法の専門教員とマーケティング分野で統計的分析知見のある教員（いずれもゼミの指導教員以外）がペアとなって論文指導に当たるよう調整を行った。

投稿・発表セミナーでは、国際的な査読付き学術雑誌への投稿を促すため、海外から査読付き学術雑誌のエディターの立場にある研究者、ないしは豊富な論文発表経験のある研究者を招いた。また、国際学会発表のトレーニングセミナーでは、国際コミュニケーションの専門家を招き、その発表を直接指導し、学生が、発表スライドの作り方から英語による発表の仕方まで、国際学会での自分の実際の研究の発表を実地にトレーニングできるようにした。

研究セミナーは、他の研究者が行った研究を本人から解説してもらう場であり、国内外からの一流研究者を招き、その研究について発表してもらった。このセミ

ナーは、欧米の研究界ではシステム化されている大学間の恒常的オープンセミナーの仕組みを導入したものである。博士論文発表会は、課程博士号の透明化の仕組みとして導入したものであるが、教員・学生からの批判・質疑応答を聴講することに教育的効果があることから、積極的な参加を促した。

**(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)**

論文作成セミナーを導入したことで、2006年度までは授業における統計学の教授と、ゼミにおける研究での統計学利用の指導とが分離されていたものを、学生が双方をリンクさせて研究できるようになった。また、投稿・発表セミナーを通じ、学生は、どのようにすれば査読付き雑誌に投稿できるかを知ることができるようになった。そして、国際学会発表のトレーニングセミナーによって、国際学会発表における言葉、文化の壁を越えて研究成果を発表できるようになった。

研究セミナーは、学生は、このセミナーに出席することで、発表者が語る国際的水準の研究内容を知るだけでなく、セミナーを通じて行われる研究の精緻化の実際に触れ、自らも同様に研究することを学ぶことができるようになった。そして、博士論文発表会によって、指導教員やそれ以外の教員、在学生、さらには学外参加者も参加することで、幅広い批判、質問に対する対応力を身に付けることができるようになった。

以上のような取組みに呼応するかのようになり、学会報告者数と査読付き論文発表数の増加が見られた。学会報告者数は、プログラム実施2年目にあたる2008年度に81人と前年度の47人から大幅に報告数が増加した。また、2007年度までは毎年10人未満だった海外学会の報告者数は、2008年度には全報告の81人中27人となり、国際的な活躍を志向する学生が増加した。また、論文発表については、総論文数のうち査読付き論文数の内訳は、2006年度は53本中11本、2007年度は49本中10本、2008年度は47本中15本、2009年度は49本中13本となった。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

#### ④その他

##### 《人社系》

#### ●神戸大学経営学研究科会計システム専攻

##### 「経営学研究者の先端的養成プログラム」の事例

##### (具体的に何を実施したのか)

アクションリサーチは、経営学分野ではまだ十分に浸透しているとは言えない研究手法であるため、まず、学内外の専門家をまじえた「アクションリサーチ・ワークショップ」を開催した。そして、ワークショップやその他のセミナーの議論に基づいて、経営学分野でのアクションリサーチ手法のリーダーシップをとれる研究者を養成する仕組みとして、「定性的方法論研究」にアクションリサーチの講義を加えた。また、アクションリサーチを実際に教員と学生が協同して行うプロジェクトを実施した。1つは、本研究科教授の國部克彦を中心として実施したマテリアルフローコスト会計の導入プロジェクトであり、もう1つは、本研究科教授の金井壽宏を中心に実施した人的資源開発の仕組み開発である。

##### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

アクションリサーチは、研究領域、論文テーマによって関連性の度合いが異なり、また、研究成果をリサーチサイトに大きく依存する手法であることから、どの研究プロジェクトにどのように学生を関与させるかについては、研究および教育的効果を指導教員が慎重に検討したうえで関与させた。

##### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムで実施したアクションリサーチについては、実施した教員や学生のレポートに基づくと、次のような点において成果があったと評価できる。

- ①実務における課題を臨床的に解決する場に大学院生が立ち会うことで、理論の意義や応用を実感することができた。
- ②学生にとってなかなかアクセスできない企業の内部情報、機密性の高い情報にアクセスできた。
- ③介入（アクション）があるリサーチに関与することで、生きた組織の理解が促進された。
- ④フィールドリサーチ能力（アポイントメントや日程管理などの実務能力、リサーチメモの作成やデータ解析などの調査分析能力など）が向上した。
- ⑤学生が自らの理論や概念を構築し、その有効性を検証できた。

⑥問題意識の醸成と研究の発展につながった。